

近現代における楠木正成公の遺蹟の変遷と現状

The Changes and the Present Conditions of the Legacy of Masashige

Kusunoki in Modern Times

岡本 真生

Mai Okamoto

園田学園女子大学 地域連携推進機構 TA, 兵庫県尼崎市南塚口町7丁目29-1
Sonoda Women's University, 7-29-1 Minami-Tsukaguti, Amagasaki, Hyogo

あらまし：ひとたび、モノが人々に認知されると、概して、その情報の集約が求められる。モノが増えると、その必要性はさらに増してゆく。明治時代は前近代と比べて、多くのモノが見出され、情報伝達も格段に発達した時代であった。大正、昭和時代になると、さらに多くのモノが巷にあふれ、多くの人々がそれらの情報収集に躍起になった。その結果、情報の集約は加速を余儀なくされ、この時期に諸学問の勃興が促進されたといえよう。

とはいえ、諸学問が成立していく一方、集約されることなく、零れ落ちた情報も多々ある。たとえば、文化財関連データベースには、考古学や歴史学の見識をもとに、文化財の所在地や主な年代、指定を受けた年月日などは書かれているが、文化財をめぐる人々の営みについては描かれていない。

そこで本稿では、時代によって変容する遺蹟として、近現代における楠木正成公の遺蹟の変遷と現状を取り上げ、データベースに新たな視点を取り入れることを提唱する。

Summary: Once, certain things are recognized by people, the concentration of information will be demanded. If things increase, the necessity will further increase. The Meiji Era was a time when many things were discovered and the circulation of information also progressed markedly, compared with pre-modern times. When the Taisho and Showa Era came, many things were full of public and many people became all out to those information gathering. As a result, the concentration of information had to increase and it can be said that the sudden rise of learning was promoted at this time.

However, there was information which was not included, while other various learning materialized. For example, although the location of cultural assets, the main ages, and the date that received specification are written in the database about cultural assets based on the opinion of archaeology or history, it is not recorded about the working of people involving cultural assets.

So, in this paper, as legacies which change over time, the changes and the present condition of the legacies of the Masashige Kusunoki in modern times are taken up, and it proposes taking a new viewpoint in a database.

キーワード：遺蹟、人々の営み、伝承、時代

Keywords: legacy, the working of people, folklore, the times

1. はじめに

南北朝時代の武将、楠木正成については、これまで様々な文献で描かれており、その人物像には諸説ある。とはいえ、一般的に、楠木正成は後醍醐天皇のもとで奇策を講じた武将として、また湊川の戦いで戦死するまで、天皇に忠義を尽くした人物として知られている。

それゆえ、天皇制を推し進めようとする明治政府を中心として、その時代の風潮のなかで、楠木正成に対する再評価が行われ、正成は「大楠公」および「楠公さん」、息子の正行は「小楠公」と称された。また、いわゆる「桜井の訣別」や「湊川の戦」といった楠公伝承で知られる桜井驛址（桜井跡跡）や湊川神社を中心に、各地で顕彰碑が盛んに建立され、多くの顕彰団体が発足した。

そのような楠木正成の顕彰活動であるが、第二次世界大戦後はGHQ施策の影響を大きく受けたことで、一転して衰退してしまう。やがて、公教育の場においても、楠木正成が歴史上の重要人物として取り上げられることは、極めて少なくなった。一方で、こうした状況下でも、楠木正成の遺蹟を保存する人々が存在していたが、残念なことに、彼らの活動はほとんど注目されてこなかったのである。

事実、現存する楠公関連の神社仏閣では、かつて出版された神社仏閣史および郷土資料から、当時の活動の一端を垣間見ることが出来た一方、顕彰碑が建立されるだけに留まった多くの場所においては、当時の顕彰活動の全体像を伺うことは、極めて困難である。加えて、正成の生誕地とされ、楠公関連の遺蹟が点在する大阪府千早赤阪村、および正成と正行親子の「訣別の地」と伝えられる大阪府三島郡島本町の二地域においてさえも、その顕彰活動はこれまで体系的に明らかにされてこなかった。

しかし、筆者が新たに発見した史資料および現地での聞き取り調査によって、当該地域における楠公顕彰活動の規模の大きさが明らかになった。そこで、まず第2章では、上記の二地域を中心に、明治から戦前にかけての楠公の遺蹟をめぐる人々の活動について検証する。続く第3章では、同地域の戦後から現在にかけての変容に加え、近畿の他地域における楠公遺蹟の保存の具体例を提示することで、戦後、遺蹟の保存に携わった人々の活動が、如何に多様化したかを見ていく。第4章では、時代とともにその価値観を変容させる文化財をデータベース化する際に、それらに付随する人々の営みを考慮する意義について述べる。

2. 楠木正成公の遺蹟の変遷

— 明治から戦前にかけて —

明治期の楠公顕彰活動は、1868（明治元）年、湊川の戦いの地とされる兵庫県神戸市に、楠木正成を主神とする湊川神社創建の宣下があったことに始まる。次いで、1875（明治8）年には、正成の生誕地である大阪府千早赤阪村で、顕彰碑「楠公誕生地碑」が建立され、さらにその翌年には、正成、正行親子の「訣別の地」とされる大阪府島本町にも、顕彰碑「楠公訣別處碑」が建立された。

加えて、正行が戦死したとされる四條畷には、「小楠公之墓碑」が1878（明治11）年に建立され、1889（明

治22）年には、正行を主神とする四條畷神社創建の宣下があり、その翌年、四條畷神社が創建された。

(1) 大阪府千早赤阪村

当地に「楠公誕生地碑」が建立されたのは1875（明治8）年であるが、それに先立ち、すでに文禄年間から、河内の地方領主によって祠や神社が建立されていた。しかし、周圀の開墾によりそれらは荒廃していったという¹。

そうしたなか、1875（明治8）年2月には、大久保利通が、四條畷や千早赤阪を狩猟のため2日間歴訪した。その際、こうした祠の惨状を嘆き、堺縣にその場の保全と新たな石碑の建立を求めたという。結果、1875（明治8）年に「楠公誕生地碑」が建立された。

しかし、その6年前の1869（明治2）年、堺縣知事であった小河一敏が神祇官に対し、河内における楠氏顕彰の建白書を提出した経緯があったという²。残念ながら、堺縣知事の建白書は認可されなかったが、6年の時を経て、大久保利通発案の建白書によって、楠公誕生地碑が建立された事実は、極めて重要である。

また、1908（明治41）年には、この石碑を含めた一帯を保存していくために、「楠公誕生地保勝会」が発足した。この団体によって、新たな敷地の購入や玉垣の設置、休息所などの諸施設や道路整備が行われたという。加えて、注目すべきは、当団体の会長が、大久保利通の三男の利武であったことである。

この団体の明確な運営時期は不明だが、1918（大正7）年には、新たに「楠公顕彰會」が発足し、千早城跡に通じる橋および無料宿泊所の建設、道路整備などが行われた³。当団体は、1922（大正11）年7月28日に社団法人化し、本部を京都市上京区に、支部を当地と東京市芝区に設置し、全国規模の顕彰活動を行ったとされる。

昭和初期、「楠公誕生地碑」では、近隣学生が学校単位で石碑を清掃するという奉仕活動が盛んに行われた。また、楠公没後600年にあたる1935（昭和10）年には、周辺の楠公伝承地でも盛んに顕彰活動が行われた。

例えば、寄手塚・味方塚の前では「大楠公赤十字祭」が行われるとともに、当時の村長がブスマス機に乗り込み、ビラまきををしたという。また、徳島県の森下白

¹ 大熊權平（1914）『大楠公奮忠事歴』楠公誕生地保勝会、227頁。

² 尾上信太郎（1938）『史蹟赤坂と千早』上田盛文堂、64頁。

³ 尾谷雅比古（2002）「昭和9年における建武中興関係史蹟の指定について—大阪府を中心に—」『藤澤一夫先生卒寿記念論文集』、149-167頁。

石が中心となって、全国の老若男女に資金を募り、高さ43尺の奉獻塔(図3-5)を建立した⁴。さらに同年、正成の戦場と伝えられる上赤坂城址(跡)や下赤坂城址(跡)にも、有志によって顕彰碑が建立された。

なお上赤坂城址の顕彰碑は、その後戦禍が拡大したため、山頂に安置されることなく、地元住民によると、1983年まで城下の二河原邊地区の消防署の横に置かれたままになっていたという。

(2) 大阪府三島郡島本町

正成と正行親子の「訣別の地」として知られる当地には1876(明治9)年に、はじめて顕彰碑が建立された。この時建立された「楠公訣別之處碑」はハリ・パークスという英国公使による書である。この顕彰碑が建立された背景は定かではないが、数十年後、老松は枯れ、玉垣は倒れ、荒廃したという⁵。

その後の経緯に関しては、敷地内に設置された案内板に、昭和初期に敷地の整備・拡張が行われたという旨が記載されているのみで、詳しい経緯はこれまで明らかにされていなかった。しかし、筆者の調査で、事業に携わった有力者たちの書簡や文献等から、近現代における櫻井驛址の整備・拡張事業は、明治末期と昭和初期の二度にわたって行われたことが明らかになった。ここでは、紙幅の都合上、それぞれの事業概略のみを紹介する。

まず、明治末期に行われた第一回目の事業は1910(明治43)年に伊豆凡夫中將一家が、この地を訪問し、顕彰碑とその周辺に建てられた玉垣の倒壊を目の当たりにしたことがきっかけである⁶。伊豆は、大阪日報の齊藤吊花や三島郡長をはじめ、近隣の町村長に声をかけ、『大阪毎日新聞』に下記の記事を掲載した。

櫻井驛址修興 楠公父子訣別の史蹟たる三島郡櫻井驛には僅かに一基の小碑あるのみにて夫さへ荒廢に傾き國民教育上絶好の遺跡の年と共に次第に湮滅に歸せんとするより植場代議士、吉住元策等の有志は今回其の修興を企て高崎知事を総裁とし土方伯、東久世伯、徳川伯及び住友吉左衛門、藤田傳三郎氏

等東西地名の紳士十九名を賛助員として汎く寄附を募り宏壯なる忠孝の碑を建て附近を開拓すべしと
(1911(明治44)年3月11日付)

ここで注目すべきは、当時の有力者を賛助員として掲げ、さらなる寄附金を募った点である。その結果、1911(明治44)年頃に、高崎知事を総裁とした「楠公父子訣別之處修興会」という顕彰団体が発足した。

その後、新たな石碑の建立と敷地の整備を目的に寄附金を再度募集するが、事業は難航し、伊豆も定年退職したことで、西品川に移住したという。しかし、伊豆は陸軍のネットワークを用い、陸軍大将である乃木希典に対し、現地の荒廃や建碑の必要を説き、碑文の揮毫を依頼した。後日、1912(明治45)年6月に、「楠公父子訣別之所、陸軍大将乃木希典書」と揮毫したが、後日、修正分を持参したという⁸。

その翌月、7月30日に明治天皇が崩御され、9月13日に、乃木將軍は天皇の死を悼み殉死した。乃木將軍の死後、揮毫のエピソードが広くメディアで取り上げられたことにより、櫻井驛址が広く認知され始めたということである。

加えて、寄附金が急激に増加し、同年、櫻井驛址に「楠公父子訣別之所碑」が建立されるに伴い、敷地の整備、拡張が行われるに至った。この工事の際の、植樹寄贈や除幕式に関する具体的なエピソードに関しては、別稿に譲ることとする。

その後、この地は1921(大正10)年の3月3日に、「国指定史蹟 櫻井驛址」として指定された。また、1928(昭和3)年には、中川録太郎村長の呼び掛けで「櫻井楠公会」が発足した。当会は、地域の有力者が役人となり、当地の保存、維持に努め、毎年5月16日には楠公祭を開催したという。

楠公没後600年にあたる1935(昭和10)年には、櫻井驛址においても、盛大な祭りが開催された。この2年後の1937(昭和12)年の秋に、一瀬桑吉という大阪の実業家が当地を訪れたことがきっかけで、第二回目の整備、拡張事業が行われることになる。

第二回目の事業では、この地を「虚飾、俗化、遊園地的ニ流ルルコトヲ避ケ寧ロ鈍重ニ傾クモ、史蹟ノ聖地トシテ努メテ崇高」にすることが求められた⁹。その結果、表2のように、敷地内に玉垣を含め顕彰碑が12

⁴ 千早赤坂村史編さん委員会(1980)『千早赤坂村誌 本文編』、896頁。

⁵ 伊豆凡夫(1936)「嗚呼大楠公櫻井驛址建碑に就いて」、近藤保雄『大楠公六百年祭記念 護国の神大楠公』日本精神運動社、141-150頁。

⁶ 敷地内には10枚の案内板が設置されているが、敷地の拡張・整備に関しては、「昭和に入ってから、敷地の北と南に拡張され」という記述のみである。

⁷ 前掲5)と同様。

⁸ 前掲5)と同様。

⁹ 不明(1937)『楠公父子訣別之所 櫻井驛址修理拡張に就いて』、16頁。

個も並び立つ、大史蹟公園となったのである。

島本町においては、千早赤阪村とは異なり、附近に他の関連伝承地は点在していないため、ここ櫻井驛址を中心に、顕彰碑の建立や団体の設立が相次いだといえよう。とはいえ、島本町においても、櫻井驛址附近に青葉公園が開園され、その中央には大きな楠公の銅像が台座の上に据えられ、町役場前にも楠公の銅像が設置されたというから、この地の楠公熱も非常に高かったようである。

3. 楠木正成公の遺蹟の変遷

— 戦後から現在にかけて —

本章では、前章で取り上げた同地域の戦後から現在にかけての変容に加え、近畿の他地域における楠公遺蹟の保存の具体例を提示することで、遺蹟の保存に携わった人々の営みが、戦後如何に多様化したかを見ていく。

(1) 大阪府千早赤阪村

戦後の1950年代半ば、楠公顕彰会を設立する動きが起こった。同時に、楠公にゆかりのある千早、赤阪、東条の3地区が、合併へ向けた動きを見せ、これは住民の6割の賛成を得るまでになった。しかし、この合併案は、様々な過程を経て、結局流れてしまった¹⁰。当時を知る住民によると、それと同時に楠公顕彰会を設立する動きも流れたという。とはいえ、戦後の混乱の中で、たとえ一時期でも楠公関連の遺蹟を保存する動きが登場し、それが地区合併案と結びついていた点は注目に値するであろう。

やがて約20年の月日が流れ、1974年3月に、個人の呼びかけで、千早赤阪村の森屋地区の有志約30名が東京へ赴き、皇居前にある楠公銅像の清掃を行った¹¹。清掃から数日後、村役場から金一封と共に、千早赤阪村を単位とした会の発足を打診されたという。その結果、各地区の区長が住民に参加を呼び掛け、会員を募り、同年10月には、先の合併案で流れた楠公顕彰会とは全く異なる組織である「千早赤阪村楠公史跡

保存会」が発足した。

戦後における楠公関連の遺蹟保存に関する団体としては、これに先立つ3年前に、隣の河内長野市にある観心寺(図3-12)において、「観心寺楠公会」が発足しているが、この団体の発足経緯は、依然として戦前色の濃いものであったという。その一方で、千早赤阪村楠公史跡保存会は、戦前色から離れ、村という自治単位を活用した点で、先駆的存在であるといえよう。

千早赤阪村楠公史跡保存会発足の約2年後に創刊された会報には、1) 荒廃しつつある史跡の保存・修理復元、2) 定期的な史跡の清掃、3) リクリエーション親睦をかねての史跡めぐり、4) 講演会及び研修会、5) その他本会の目的達成のため必要なる事業という5つの理念が掲げられた。

発足の翌年には、昭和初期につくられた奉獻塔の整備、その周辺における案内板やベンチの設置など、具体的活動がなされた。また、同会の功績として、1935(昭和10)年に建立された上赤坂城址の顕彰碑移設が挙げられる。この顕彰碑の移設は、戦後、急な山道のため一度中断を余儀なくされたが、同会の働きかけにより、ヘリコプターが手配され、現在の場所まで移設されたという。

1875(明治8)年に建立された「楠公誕生地碑」に関しては、千早赤阪村楠公史跡保存会が毎年5月に行う楠公祭に合わせて、度々整備がなされていたが、1986年の村制施行30年を記念して、村が1000万円を出資し、「楠公誕生地碑」の南隣に「千早赤阪村郷土資料館」を設立した。

その後の1991年には、NHK大河ドラマ『太平記』の放送による影響で入館者数が急増したことに伴い、近隣の楠公関連の遺蹟を案内する団体として、「千早赤阪村郷土史友の会」が発足した。翌年1992年には、楠木正成関係の史跡等の維持・保存を永続的に行おうという意識が高まり、1974年に発足した千早赤阪村楠公史跡保存会も社団法人化した。当団体の社団法人化に伴い、現在、千早赤阪村郷土史友の会はその傘下として活動している。1993年には、楠公誕生地碑の東側に村の文化施設「くすのきホール」を、北側に車70台を収容できる駐車場を整備した。

1999年7月26日には、楠公ゆかりの下赤坂城址(図3-4)周辺が農林水産省により日本の棚田百選に選ばれたことで、千早赤阪村では棚田の補助金を元手に、東屋等が設置された。

さらに2000年には、千早赤阪村が、約1800万円も

¹⁰ 前掲同と同様

¹¹ ある工場の経営者が関東で開かれた会議に出席した際、皇居外苑にも立ち寄ったという。しかし、目にしたのは、「威厳のある楠公さんではなく、肩に段ボールのくずがたくさんのった、なんとも嘆かわしい」姿であり、その姿が心に残った同人物は後日、元近衛兵をはじめ、消防団や青年団に「銅像の清掃に行きたい」と相談を持ちかけた。そして、1974年3月に森屋地区の有志約30名弱が立ち上がり、皇居の銅像の清掃を行ったという。

の巨額を投じて、「産湯の井戸」(図3-2)を整備した。「産湯の井戸」は、正成が誕生した際に、産湯として使用したと云われる場所であり、その旨の案内板も掲げられている。しかし、この時期まで、「産湯の井戸」は具体的な顕彰活動の場として見出されておらず、言い換えれば、戦後新しく見出された楠公関連の遺蹟といえよう。

(2) 大阪府三島郡島本町

近現代において、当地の櫻井驛址では二度の大規模な敷地の整備・拡張が行われたことを第2章第2節で明らかにした。

では戦後、広大な敷地をもった櫻井驛址はどうなったのだろうか。結論から述べると、先に見てきた千早赤阪村とは異なり、ここ櫻井驛址では楠公関連の遺蹟の保存は進まなかったといえる。

そのため敷地内には草木が生い茂り、人の往来も高齢者がゲートボール場として利用する程度であった。戦後最初に行われた敷地内改変は、「楠公父子訣別之所碑」前に安置されていた玉垣の撤去工事に過ぎない。加えてこの事業も、当時の工事関係者曰く、「あくまで、子どもの安全を確保するため」という名目で行っただけであり、楠公関連の遺蹟の保存を目的としたものではなかった¹²。

櫻井驛址を保存する試みが消極的である中、櫻井驛址の北西を走る JR 京都線に新駅設置案が浮上した。それにより 1997 年に櫻井驛址の北西部が新駅設置場所として打診されたことで、櫻井驛址を含め周囲の整備に関する検討が始まった。

実際、2008 年に整備工事が始まり、現在では、櫻井驛址の草木は取り除かれ、遊歩道も整備され、市民の憩いの場となっている。休日には、個人や団体の観光客が、時には、詩吟団体が「ぜひ楠公さんの御前で披露したい」と正装姿で訪れ、詩吟を奉納することもあるという。また、櫻井驛址前の JR 島本駅が 2008 年に開業した際、「楠公歌の会」という湊川神社で活躍する団体が開業セレモニーに出席し、「楠公の歌」を奉納するなど、他の楠公ゆかりの地との交流も行われた¹³。

こうしたいわば楠公熱の高まりを受けて、島本町では兼ねてから楠公関連団体の発足を願っていた住民を

代表して、自由民主党に所属する一町会議員が発起人となり、会の発足に動き出した¹⁴。その結果、ようやく 2010 年 3 月に「楠公父子の会」が発足した。当会の特徴としては、地元民を中心に組織された千早赤阪村楠公史跡保存会とは異なり、会員がより幅広いネットワークを持っている点が挙げられよう¹⁵。

(3) その他

本節では、千早赤阪村、三島郡島本町以外の近畿の他地域における楠公遺蹟の保存の具体例を紹介する。

例えば、大阪府四条畷市にある飯盛山山頂や往生院にある正行銅像は、昔からある台座の上に、新たな石像を安置するという形で、現在でも保存がなされている¹⁶。その一方で、昔の石像に新たな台座を設けて安置しているところもみられる。奈良県吉野市にある如意輪寺(図1-11)が、その例である。

当寺院は、四條畷の戦いに赴く際に、正行が今生の別れの詩を扉に刻んだことで知られる寺で、宝物殿には楠木ゆかりの品々が展示されている。宝物殿の庭園に安置されている楠公父子の石像は、如意輪寺の住職の話によると、かつては西大寺の住職が戦後の闇市で購入したものであるという。その後、長らく西大寺御用達の植木屋に預けられていたが、植木屋の廃業が決まり、西大寺の住職の元に戻ったという。

しかし最終的には、西大寺に安置場所がないため、西大寺から如意輪寺へ石像の引取りが依頼されたという。この石像の経緯を開いた如意輪寺の住職は、1991年、宝物殿の庭園に新たに台座を設けて石像を安置し、開眼法要を行ったという。また石像の隣には、「楠公の歌」の一章節を刻んだ記念碑が合わせて建立された。

4. 楠公遺蹟の変遷と現状をデータベースへ反映させる意義

筆者が近畿圏を中心に実地調査した限り、すべての楠公関連の遺蹟で、途中一時の断絶を経験したものの、

¹⁴ 会の発足に尽力した人物によると、呼び掛けに賛同した人々は、約1年をかけて結成趣意書や会則の規定を行い、会員の知人を通じて配布し、会員募集を諮ったという。

¹⁵ 2011年10月現在で、会員数は64名に上る。

¹⁶ 第2章第2節の末尾で触れた、島本町内の青葉公園に設置された大楠公銅像や町役場前に据えられた楠公銅像は戦時中に供出された。青葉公園では残った台座の上に、楠公父子の別れを模したコンクリートの像が安置されたが、風化がはやく90年代には、像の顔の表情も全く分からなくなった。偶然この地を訪れた大阪府岸和田市の某石材店主によってつくられた御影石の楠公父子の石像は2005年に島本町へ寄贈されたという。その石像は現在、昔の台座の上に安置されている。

¹² 撤去された玉垣は、今も桜井公園駅の隅に安置されている。

¹³ 2005年12月20日に、湊川神社の団体として正式に発足した団体「楠公歌の会」は、湊川神社に限らず、千早赤阪村や櫻井驛址、四条畷神社にまで足を運び、コーラス風にアレンジした「楠公の歌」を奉納し、未来に受け継いでいこうとしている。

戦後も何らかの形で人の手が加わっていることが明らかになった。表2は、楠公関連の遺蹟の変容時期と変容パターンの概略をまとめたものである。

本稿では紙幅の都合上、全ての遺蹟を紹介することは出来ないが、戦後におけるすべての楠公関連遺蹟の変容パターンは以下の五点に大別される。

まず一点目は、「記念碑の移設」である。これまで本稿では、戦前に建立された石碑に対して「顕彰碑」という語句を使用してきたが、戦後における活動からは「顕彰」という意味合いはほとんど見受けられない。そこで、ここでは顕彰碑をはじめ、かつて建立された銅像や石像をあわせて、「記念碑」と呼称する。

記念碑の移設に関しては、兵庫県神戸市にある湊川公園の大楠公銅像が先駆的なものとして挙げられる。本銅像は住民の働きにより、戦時中に供出されることなく、戦後も公園の南側に設置されていたが、1968年から1971年にかけて行われた公園の整備事業の一環で南側から北側に移設された¹⁷。

つづく二点目としては、「新たな記念物の建立」が挙げられる。戦後改めて建立された記念物の数は限られているものの、その中にはNHK大河ドラマ『太平記』放送で観光客が増えたことを機に、小楠公像を復活させた往生院(図2-7)の事例などが含まれる。

三点目の遺蹟の変容パターンは、「敷地の再整備」である。これに関しては、先に千早赤阪村の楠公誕生地碑や櫻井驛址について述べた通りで、戦後の変容の規模ではこの二者に勝る動きはみられない。

上記以外の一例として、富田林市の楠母神社跡(図3-11)が挙げられる。この地は、もともと楠公ゆかりの地であったが、狛犬や鳥居が倒れ、その境内は荒廃してしまっただけでなく、この地に桜を植樹し、桜の名勝地にしようとする動きが、地域住民を中心として2000年から始まっている。これは未だ小規模な活動であるが、近年新たな文脈の中で、かつての顕彰地を位置づけるという試みは、注目されるべき戦後の楠公関連遺蹟の変容の一つといえよう。

遺蹟の変容パターンの四点目は、「新たな団体の発足」である。そして、最後の五点目は、変容パターンの一点目から四点目のように、目立った遺蹟の変容は見られないものの、附近での案内板の設置など、小さな変化がみられた事例を「その他」と位置づけた。

注目すべきは、四点目の「新たな団体の発足」を経

験した楠公関連遺蹟は、少なくとも一点目から三点目のいずれかの変容パターンを、同時に含んでいる点である。上記に該当する楠公関連遺蹟は計五つあるが、団体の発足が記念碑の移設や新設、附近の遺蹟の再整備に先立つ場合もあれば、その逆の場合もある。

すなわち、一見、法則性があると思われる事例も、実に多様である。しかし、少なくとも、先に取り上げた新たな団体の発足地は、楠公の伝承地としてかつて信憑性が高いと思われていた場所に集中していることを指摘できる。

しかしながら、遺蹟を集めた既存のデータベースには、所在地、発見年、指定年月日や指定基準など必要最低限の情報が記載されているに過ぎない。そこで筆者は、既存のデータベースに組み込まれる情報の他に、それぞれの土地がどのような伝承や語りを有しているかを反映させることが不可欠であると考ええる。

加えて、単なる歴史的事項の確認に留まるのではなく、より幅広い視野で、遺蹟とその活動実態を明らかにしなければならない。そのためには、それぞれの場所における人々の営みを可能な限りデータベースに反映させる必要があるのではないだろうか。

これまで、遺蹟をはじめとした文化財は、考古学者や歴史学者を中心に取り上げられてきた。しかし、今後の遺蹟研究は、当該地域の伝承や語り、その変化など多様な内容を組み込むことで、民俗学者にもより大きく注目されるのではないだろうか。また、そうした伝承や語りや、どのような過程を経て広まったかに関して、参考となるテキスト文献をデータベース内で提示することで、国文学者も積極的に遺蹟に目を向けるのではないだろうか。既存のデータベースに、筆者が指摘した様々な情報を組み込むことで、諸学問間の融合および更なる発展が期待できるであろう。

5. おわりに

今回は楠公関連の具体的な遺蹟を取り上げ、既存の遺蹟関連のデータベースに更なる情報を取り入れる必要性を提言した。時代を超えて、また多様な形で保存される楠公関連遺蹟の場合、データベースに更なる情報を組み込むことで、研究分野の裾野が広がると考える。そうして、異なる分野の研究者が協力し、遺蹟にまつわる様々な実態が解明されれば、文化財を通じて、時代毎の差異や時代との繋がり、各時代の再検討も可能であり、研究がさらに深化するであろう。

¹⁷ 現在の公園管理担当、神戸中部建設事務所の証言による。

最後に、楠公研究の今後の進展のために、一つの方向性を示しておきたい。それは、正成親子が千早赤阪村から櫻井驛址へ至る道のりと、櫻井驛址で子別れをしたとされる正成が湊川の戦いで戦死するまでの行動を歴史的に考察することである。この時代の研究は、今現在大きな進展を見せていないが、彼の生前の活動に関する史実が明らかになれば、これからの保存活動に役立てることが可能であるだろう。加えて、保存活動の機運が高まれば、先に述べたデータベースに様々な情報を組み込むことに対する人々の意識も高まっていき、相乗効果が得られるであろうと、筆者は考える。

☞ 註および参考文献は、各ページを参照のこと。



図2 本稿で扱う調査対象地 (A)

注) 調査結果より筆者作成

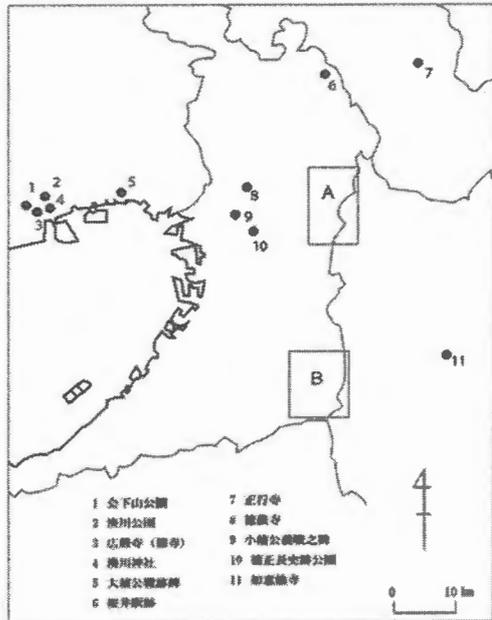


図1 本稿で扱う調査対象地 (全体)

注) 調査結果より筆者作成

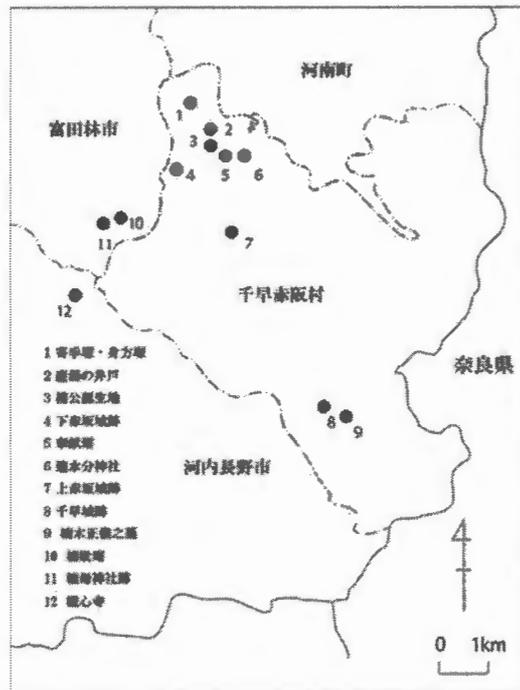


図3 本稿で扱う調査対象地 (B)

注) 調査結果より筆者作成

表1 櫻井驛址における石碑一覧

石碑名	建立年	碑文		建立者	石碑の形態	
		表面	裏面と側面		形状	大きさ
1 楠公訣児之處碑	1876 (明治9)	「楠公訣児之處」	パークス作の英文	(不明)	石板	中
2 忠義貫乾坤碑	1894 (明治27)	「忠義貫乾坤碑」 寄付金額と氏名・出身地	発起人の氏名と出身地	有志	石板	小
3 大隈重信侯手植之松碑	1911 (明治44)	「大隈重信侯手植之松」	×	個人	石柱	小
4 楠公父子訣別之所碑	1912 (大正元)	「楠公父子訣別之所」	細川潤次郎の撰文	(不明)	石板	大 (高さ4.5m, 幅1.8m, 厚さ0.75m)
5 閑院宮殿下御手植之楠碑	1913 (大正2)	「閑院宮殿下御手植之楠」	×	個人	石柱	小
6 御下賜金耄封宮内庁碑	1913 (大正2)	「御下賜金耄封 宮内省」	×	(不明)	石柱	小
7 苑内 千式百坪碑	1913 (大正2)	奉納苑内壹貳百坪 個人名	×	個人	石柱	小
8 史蹟 櫻井驛址碑	1921 (大正10)	「櫻井驛址」	史跡指定日	(不明)	石柱	中
9 明治天皇御製碑	1931 (昭和6)	明治天皇作の和歌	「七生報国」 頼山陽翁過櫻井驛詩	個人	石板	大 (高さ5.2m, 幅2.1m, 厚さ0.25m)
10 楠公六百年祭記念石碑	1935 (昭和10)	「楠公六百年祭記念」	寄贈者名と住所	個人	石柱	小
11 奉納 玉垣請願者碑	1935 (昭和10)	奉納 玉垣 誓願者名	櫻井楠公會	団体	石柱	小
12 櫻井驛址碑	1941 (昭和16)	「史蹟 櫻井驛址 (楠正成傳承地)」	史跡指定日	(不明)	石柱	中

表2 戦後における遺蹟の変容時期と変容パターンの概略

楠公関連の遺蹟	変容時期	遺蹟の変容パターン概略					備考
		1) 記念碑の移設	2) 新たな記念物の建立	3) 敷地の再整備	4) 新たな団体の発足	5) その他	
1 会下山公園	(詳細年不明)					○	図1-1
2 湊川公園	1968-1975年	○					図1-2
3 廣藏寺(楠寺)	2009年	○	○				図1-3
4 湊川神社	2006年		○		○		図1-4
5 大楠公戦址碑	2008年頃			○			図1-5
6 櫻井驛址	2005-2010年	○ (2009年)	○ (2005年)	○ (2009年)	○ (2010年)		図1-6
7 正行寺	1974年	○					図1-7
8 徳藏寺	2003年	○					図1-8
9 小楠公義戦之碑	2009年	○					図1-9
10 楠正長史跡公園	2004年			○			図1-10
11 如意輪寺	1991年	○					図1-11
12 小楠公墓地	(詳細年不明)					○	図2-1
13 四条蔵神社	2005年		○		○		図2-2
14 飯盛山山頂	1972年		○				図2-3
15 楠木正行の首塚	(詳細年不明)					○	図2-4
16 牧園神社	(詳細年不明)					○	図2-5
17 霊光院	1958年		○				図2-6
18 往生院	1991年		○				図2-7
19 寄手塚・味方塚	(詳細年不明)					○	図3-1
20 産湯の井戸	2000年			○			図3-2
21 楠公誕生地	1974-2005年		○ (2005年)	○ (1993年)	○ (1974年)		図3-3
22 下赤坂城址	2003年			○			図3-4
23 奉獻塔	1975-76年			○			図3-5
24 建水分神社	(詳細年不明)					○	図3-6
25 上赤坂城址	1983年	○					図3-7
26 千早城址	(詳細年不明)					○	図3-8
27 楠木正儀之墓	(詳細年不明)					○	図3-9
28 楠毗庵	1963年	○					図3-10
29 楠母神社址	2010年			○			図3-11
30 観心寺	1971年		○		○		図3-12